

北アルプス大日三山 山行報告

【山域】 北アルプス北部

【ルート】 富山～称名滝～大日平～大日小屋（泊）～大日岳往復～奥大日岳
～雷鳥平～室堂平～（アルペンルート）扇沢～帰葉

【日程】 2018年8月18日～19日（前夜発）

【メンバー】 鶴田（GL） 菅井

鶴田 記



日本一の落差を誇るという称名滝と、毎年行く立山初滑りで室堂平から見る奥大日岳の豪快な山容に魅かれてこのコースを企画した。

【1日目】 晴れ

夜行バスは別々だったが早朝菅井さんと富山駅で落ちあう。富山地方鉄道に乗り立山駅に向かう。常願寺川に沿って遠く立山連峰を望みながら行く電車は誠に趣がある。立山駅から称名滝行のバスに乗り継ぐが、ここで鶴田がストックを駅構内に忘れて予定していたバスに乗れず1時間ほどロスしてしまった。

数日前に降ったと思われる雨を集めた称名滝は迫力があり、かなり離れた展望台でも霧で

ひんやりする。



(称名滝)



(大日平木道脇のリンドウ)

ここから尾根に取りつくが、いきなりの急登。喘ぎながら行く。称名川の岸壁が下に望まれるようになるころ、傾斜が緩くなり大日平の一角に出る。大日平は傾斜湿原で右手遠くに弥陀ヶ原が見渡せる。大日平山荘で一休みして大日平を突っ切り再び急な登りとなる。道は大きな石の上を行くので足元に気を遣う。70代のコンビニはきついコースと感じ始めたが行くしかありません。そういえば下りてくる人にはけっこう会うが、登っていく登山者は我々だけのようだ。でも道の真ん中の石の間を冷たいきれいな水が流れのどを潤しながら行く。ようやく大日小屋が見え始めると稜線に飛び出る。いきなり目に飛び込んでくる剣岳。小屋から冷たいビールを買ってきて乾杯。遮るものもない剣岳の勇姿を見ながらのひと時は幸せが一杯だ。

ランプの食堂で夕食を済ませ、比較的余力を残していた鶴田が大日岳山頂を往復した。夕日に赤く染まる剣岳を眺め、能登半島に沈もうとする夕日と立山連峰にたなびく雲から出る霧でブロッケン現象が見られた。



(大日平)



【2日目】晴れ

朝食後、今度は二人で大日岳を往復してから小屋をあとにする。すばらしい天気の中を稜線散歩。左手に剣、右手には雪渓の続く深い称名溪谷を隔て弥陀ヶ原がのびやかに広がる。高原道路を行くバスの姿も見える。足元には花も見え始める。特筆すべきは「チングルマ」。花は落ちてしまっていたがいたるところに群落がある。花盛りのころはさぞや美しいだろう。また「リンドウ」もすばらしい。下の方から稜線までどこでも見られ、高度を上げるにしたがって紫が濃く鮮やかになるようだ。奥大日岳の頂上から下りはじめ、色とりどりのテントの雷鳥平、煙を上げる地獄谷、そして室堂平の山荘などが間近に見える。下りきって、流れにかかる橋を渡るとそこは繁華街だ。室堂平までは結構な登り（といっても階段ですが）。無言で疲れた足を引きずり多くの人に抜かれながら室堂平のターミナルに到着した。ここからアルペンルートで扇沢へ、扇沢からバスで信濃大町へ。タイミングの良い便に恵まれた。信濃大町の駅で菅井さんはさっぱりした身なりに、鶴田はそのまま大糸線に乗る。大糸線の車中で、菅井さんが持っていた菅傘が縁で、この地の肉屋さんで働いているというベトナムの若者と親しく言葉を交わす。松本からは千葉行の「特急あずさ」で、いつもの車とは一味違う楽しい車中を過ごした。



(左手に剣)



(右手に称名溪谷と弥陀ヶ原)



(花を落としたチングルマ)



(咲き残っていたチングルマ)

写真はすべて菅井さんが撮影してくれたものです。

今回の山行、行き夜行バスの予約がたいへんだと思い当初は単独行で計画書を提出したが、それを見て菅井さんが同行してくれた。やはり一人より二人の方が楽しい。菅井さんに感謝だ。またコースも計画では立山駅からアルペンルートに乗り、弥陀ヶ原の途中で降りて八郎坂を下って称名滝への予定でしたが、それは大変なので今回のコースにした。今回、目にした伸びやかな弥陀ヶ原をいつか歩いてみたいと思っている。

鶴田 記